伝わる。

支葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伝わる。

【Ｎコード】
Ｎ０９００Ｗ

【作者名】
支葵

【あらすじ】
猫視点の飼い主（ご主人様）とのお話です。

（前書き）

この話は猫視点で描かれておりますので、ご理解下さい。

私のご主人様はいつも笑っている。
私を見ると、暑い時期に庭で咲いていた円くて黄色い花みたいな笑顔を見せてくれる。
「お前はいつ見ても可愛いなぁ」
そう言って、幸せそうに私を見るのだ。
ご主人様たちの会話からして”可愛い”は褒め言葉のようだ。
ご主人様は毎日決まった格好をして、私が寝ようかと思う時に家を出て行く。そして青かった空が赤くなってくると帰って来るのだ。
いつも私はご主人様が帰ってくるときに出す特有の音を聴いて家の出入り口で出迎えをする。２つの薄くて円い骨の様なのがついている乗り物を出入り口の横に置いているのを昔見たことがある。
きっとあれを置いている音だろう。
その音がするまで私はご主人様の親が買ってくれたフカフカする柔らかい物の上でグッスリと眠るか、主人の前で粗相のないようにと毛繕いをする。
いつ見てもこの家は平和だ。
私を撫でる手は皆優しいし、時間になるとご飯もくれる。
時々尻尾を触られて嫌だけど、抵抗すれば「ごめん」とほほ笑んで止めてくれる。

あ、帰ってきた。

尖った耳をピクリと動かし、ご主人様が帰って来る時の音が聞こえ出入り口へと向かう。
いつもの通り、扉が開きご主人様が帰ってきた。
彼は私を見ると小さく「ただいま」と言って、照れ臭そうにはにかんだ。

いつもとは違うご主人様の表情に私は驚いた。そして私はさらに驚くことになる。
「お邪魔します」
ご主人様の背後には髪が長くて肌が白い、知らない女の子が立っていたのだ。
『この人…誰？』
そして彼女もまた照れ臭そうに笑いながら、私を見る。
「可愛い猫ちゃんね」
「そうだろ？自慢の愛猫さ」
「話に出してたのってこの猫ちゃんの事かぁ、フワフワしてそうね。触っても平気かな？」
2人の会話など耳に入らず放心していた私の頭を彼女は撫でる。突然の接触に驚いて、ついいつもは隠している爪を出して構えた。
「あれ、人見知りなのかな？」
「あんまり身内以外は会わないからな、そうかもしれない。とりあえず、中へ上がろう」
そこにご主人様の親がやってきた。ご主人様の背後の存在を知り、少し声色が変わる。
「まぁ、彼女さん？また美人で清楚な子を連れて来た事…」
嬉しそうに和気あいあいと話す3人を、私はぼーっと見つめていた。自室へ行こうとするご主人様について行こうとすると、ご主人様の親が私を抱き上げた。
「こらこら、邪魔しちゃだめよ？」
親はふふっと笑って私をだっこする。
その後ご主人様の部屋へ行ったものの、いつも開いているはずの扉は閉まっていて、会話が弾んでいるのか開けてくれる気配さえなかった。

「ただいま」

あれから何十日も経った。
あの女の子は何回か家に訪れ、毎回私の頭を撫でようとするが、なんだかそれが嫌で毎回私は爪を向けた。
彼女といる時のご主人様は常に幸せそうで、彼女がいない時は私をだっこして彼女の話を嬉しそうに話す。
気がつけば、ご主人様から『可愛い』と褒められたのは随分前になってしまっていた。
だっこしてくれたり、頭を撫でてくれてもどこか寂しくて、私は段々と彼に寄り付かなくなった。
出入り口の出迎えも時々する程度になり、ご主人様が私に明るく笑いかけるのは少なくなっていった。

そしてある時。
たまには…と思ってご主人様の帰りを出迎えた時、いつもと空気が違ったのに気がついた。
元気がなく、ため息をつきながら何も言わずに自室へ向かう。
『具合が悪いのかもしれない』
私は急いでご主人様を追い、部屋へ向かった。
部屋でうなだれるご主人様を見て、私は側に駆け寄った。
『ご主人様、どうしたんですか？』
必死に呼び掛けると、うなだれていた顔をあげ、私を見た。
そして優しい手で私を強く抱き締めた。
ご主人様から伝わるのは沢山の悲しみや後悔。そして”寂しい”という気持ち。
何があったのかはわからないけれど、とても辛いことがあったのだとは理解できた。
「俺…別れたんだ。彼女と。喧嘩して…勢いでさ、気がついたらもう元には戻らないくらい溝ができちゃって…」
私のおでこや鼻に水滴が落ちる。
何かと思って見上げると、水滴はご主人様の目から零れるものだっ

た。
「俺最低だ…感情に任せて酷い事言っちゃった。」
ボロボロと水滴を落とすご主人様に、私は何もしないで抱き締められていた。
『ご主人様…私は人の感情はよくわかりません。でも寂しい事が嫌なことなのは私でもわかります。ご主人様…ご主人様は1人じゃない…私は、死ぬ時まで側にいます。だから、寂しくなんかないんですよ…』
彼に寄り付かなくなってからだって、たくさん伝えたい事があった。私はあなただけを慕っていて、どれだけあなたを想っているのか。その中の少しでもいいから、目から大粒の水滴を落とす彼に伝われればいいのに…
どんなに願っても、決して叶わないのは既に知っているけれど、私はずっとご主人様に語りかける。
『大丈夫です、ご主人様は1人じゃありません』
しばらくすると、ご主人様は水滴を落とす事を止め、私を見た。
その瞳にはまだ辛さが残っているが、奥には今までと変わらない優しさがあった。
そして私の頭をたくさん撫でる。今まで撫でなかった分を取り返すように。
そして少しほほ笑んで、彼は
「やっぱ可愛い。俺のこと嫌いになったのかと思ってた…」
切なそうに言うご主人様に、私は頭をすりすりと寄せ、胡座をかいた足の上で丸まった。
そんな私の全身を心地よく撫でながら
「…お前は優しい猫だね」
と言った。
”優しい”
それは知ってる。

”優しい”は辛い言葉でも、褒め言葉でもない。

”優しい”は、とってもとっても素敵な言葉…

（後書き）

完読ありがとうございます。
いかがだったでしょうか??
この話は、あえて主人も猫も特定の名前を付けてません。
なんか…名前付けない方がいいかな、と↑↑
自分自身が猫を飼っていて、親や友人と喧嘩したときとか、行き詰まって辛くなっていると、いつもは爪を立てて怒るような事（無理矢理だっこしたり）も、何も抵抗せずに受け入れてくれたり、泣いてると側にいてくれたりするので、「こういう事考えていたらいいなぁ」と思ったら、すんなり話にできました。
少し話が省略してて「ちょ…いみふｗｗ」と思った方は、突発的な文章ですので大目に見てくださると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0900w/

伝わる。

2011年10月8日14時54分発行